

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2018 冬号 **85**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集
新宮城下町遺跡の第2次発掘調査



写真：新宮城下町遺跡の調査状況

特集 新宮城下町遺跡の第2次発掘調査

はじめに

新宮市は、新宮市下本町に文化複合施設の建設を予定していますが、この土地は周知の埋蔵文化財包蔵地である新宮城下町遺跡に該当します。そのため、平成27年度から当センターが新宮市より委託を受け、発掘調査を継続的に行ってきました。今年5月からは、第2次発掘調査を行っており、今回の特集では、その成果の一部を紹介します。

遺跡の位置と歴史的環境

新宮城下町遺跡は、熊野川の河口近くに位置し、新宮城の西に広がっています(図1)。

新宮城の築城後は、新宮城がある丹鶴山周辺の広い範囲に城下町が形成されてきたことが絵図などでみてとれます。この新宮城は、関ヶ原の戦いの後に浅野幸長が紀州藩主となった際、彼の重臣である浅野忠吉によって築かれはじめました。しかし、



図1 調査地周辺図
(国土地理院の電子地形図に一部加筆)

URL <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>

1619年に浅野家の転封に伴い忠吉は広島の上野へ移り、次の藩主徳川頼宣の付家老・水野氏が新宮城の新たな城主となりました。付家老とは、自身も城を持ちながら藩主を補佐する異例の役職であり、頼宣の付家老には水野氏のほか、田辺城を持つ安藤氏がいました。

これまでの調査成果

新宮城下町遺跡では、平成27年度の試掘調査、平成28年度の第1次発掘調査と確認調査、平成29年の確認調査の4度発掘調査が行われています。

これらの調査から、この遺跡の遺構面は江戸時代・古墳時代・室町時代・縄文時代の3面あり、新宮城下町遺跡では縄文時代から江戸時代に至るまでの長い時代にわたる遺構・遺物があることがわかっています。こうした調査成果のうち、代表的なものを取り上げます。

江戸時代の遺構面からは、屋敷境の石垣や、南北方向に走る道路跡2条に囲まれた武家屋敷跡を確認しました。これらは幕末に描かれた古地図と一致し、道路は当時の主要道路であった河原町通と竹矢町通であることがわかりました。また、屋敷境の石垣は東西方向に延びており、石垣で区切られた北側の敷地は南側の敷地に比べ1段低くなっています。

古墳時代・室町時代の遺構面では、構造の異なる3種類の地下式倉庫群や、複数の掘立柱建物跡を検出しました。なかでも、13〜14世紀のものとみられる地下式倉庫は、類似した施設が神奈川県鎌倉市内に多くみられることから、鎌倉幕府との関係性が注目されています。また、川に近い地点では、

鍛冶遺構が発見されています。付近に川湊があったこと、紀伊半島南端付近という立地を踏まえると、東西の海上とも山間部ともアクセスの良いこの地点は交通の要衝として機能していたと考えられます。検出された地下式倉庫群は、やり取りする物資を保管した場であり、付近の掘立柱建物は港の管理に関わっていた可能性が高いものと考えられています。

縄文時代の遺構面では、縄文時代中期末の土器を伴った土坑が確認されています。新宮市域では縄文時代の遺物の出土例は過去にいくつかありますが、縄文時代の遺構は、この土坑がはじめての発見例です。

このように、新宮城下町遺跡の所在する当該地は新宮城の築城前から重要な地点であったことが分かっています。



図2 第1遺構面の主な遺構概略図

今回の調査成果

今回は、第1次発掘調査地点の西側で、丹鶴小学校の校舎跡を含む約3,500㎡を調査対象としています。12月現在、すでに江戸時代の第1遺構面の調査が終了し、現在では弥生時代～室町時代の遺構面である第2遺構面を調査しています。

第1遺構面

絵図や文献史料によると、この地は江戸時代には新宮城主に仕える家臣の屋敷地であったと記されています。そのため本来ここには江戸時代のそういった遺構が調査地全体に存在していたはずですが、丹鶴小学校やそれ以前の木造校舎を建てたり、昭和20年の南海地震による瓦礫を埋めたりしたことで、大部分が破壊されていました。残された江戸時代の遺構として、主に石垣や道路跡などが確認されました(図2)。こうした遺構は、江戸時代におけるこの地域の街並みを知る手がかりとなります。

石垣

第1次発掘調査で屋敷境の石垣が検出されましたが、その延長部として南側に新たに27mの石垣を検出しました(写真1)。場所によって石の大きさが異なることから、劣化した箇所をその都度積みなおすことで



写真1 屋敷境の石垣(北東から)

石垣を維持し続けたことが窺えます。石垣のうち最も古い箇所は、江戸時代のごく初期に造られた可能性があります。この時期の石垣は野面積みと呼ばれ、自然石を加工せず積み上げていることが特徴です。

道路跡

調査区南部から、南北に走る道路跡が見つかりました。この道路は、これまでの調査で検出した竹矢町通の延長線上で見つかったことおよび絵図から、竹矢町通と考えられます。この道路は片側に側溝が設け

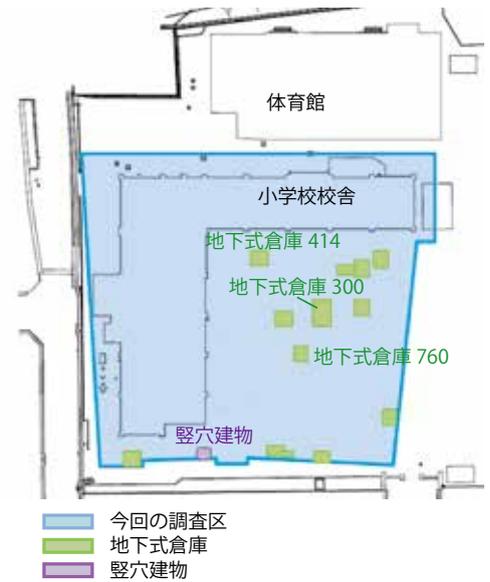


図3 第2遺構面の主な遺構概略図

られていたほか、小礫混じりのよく踏み固められた路面が複数重なっていました。このことから、この道路は改修を重ねながら江戸時代から昭和20年まで連続と利用されていたとみられます。

第2遺構面

第2遺構面では、非常に多くの遺構を検出しました(図3)。そのほとんどが平安時代末～室町時代のもですが、少数ながら弥生時代後期とみられる遺構も見つかっています。

地下式倉庫

今回の調査だけで、地下式倉庫とみられる遺構が少なくとも10基検出されました。また、地下式倉庫の可能性のある大型方形

の土坑も複数見つかっています。このうち、特に主要な特徴を持つ地下式倉庫をとりあげると、調査区北部で見つかった地下式倉庫414は、横長の石を水平に積んだ石積みが特徴です(写真2)。



写真2 地下式倉庫414(西から)

調査区やや東側で検出された地下式倉庫300では石積みを覆う形で、壁土が全面に塗られています。また、この地下式倉庫は造り替えが複数回行われた可能性ががあります(写真3)。

調査区中央部で検出された地下式倉庫760では、床面から焼土や炭化材が検出されました。この倉庫は、おそらく火災により焼失したと考えられます。中からは柱や床板のほか、床板を支える根太



写真3 地下式倉庫300(北から)



写真4 地下式倉庫760の炭化物検出状況

が炭化した状態で残っていました。これらは、倉庫の床の構造を知る手がかりとなります（写真4）。

竪穴建物

第2遺構面からは1棟だけですが、弥生時代後期と思われる竪穴建物も検出されました（写真5）。建物は一辺3mほどの隅丸方形で、主柱穴が3本確認されましたが、いずれも深さ60cmほどです。本来この柱穴は4本あったとみられますが、北東側の1



写真5 弥生時代後期の竪穴建物（南から）

本が攪乱により壊され、残りの3本だけが検出されました。また、当該期の竪穴建物によく見られる炉跡は、この建物では確認することができませんでした。

出土遺物

今回の調査では、12月中旬時点でコンテナ140箱を超える多量の遺物が出土しています。出土遺物には鎌倉時代～江戸時代の陶磁器、中世の簪とみられる金属製品や銭貨のほか、弥生土器なども見られます。

この中でも、中国製の白磁四耳壺やヘラ描き文を持つ渥美焼壺といった非常に珍しい遺物が出土しています。渥美焼は14世紀には既に生産が途絶え、西日本や日本海側ではあまり見られません。また、瀬戸焼の燭台も出土しました（写真6）。燭台は、和歌山県内での出土例が少ない、非常に珍しいものです。

今回の調査では、紀の川流域ではあまり見られない伊勢型の土鍋や東海地方の山茶碗と呼ばれる日常雑器が出土しています。また、西日本で生産される備前焼の甕や播磨型の土鍋なども確認されています。東日本のものと西日本のものが両方見つかるこの地点は、東西文化の境目であり交流点でもあるのでしよう。



写真6 瀬戸焼の燭台

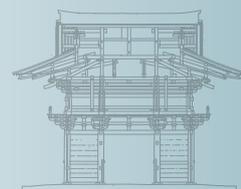
まとめ

今回の調査成果の中で重要なこととして、以前の調査で見つかった江戸時代初期の石垣の延長部および道路跡を確認できたことが挙げられます。検出された石垣や道路跡が幕末の絵図と一致していることから、江戸時代を通じて屋敷や道路といった土地区画が大きく変化しなかったことが分かりました。

中世の遺構面では、多数の地下式倉庫等を検出したことが成果として挙げられます。中でも床板や根太など倉庫の部材が残っていたことは、当時の地下式倉庫の構造を考える大きな手がかりになります。

今後、縄文時代の遺構面の調査を予定しており、さらなる成果が期待されます。

（森田 真由香）

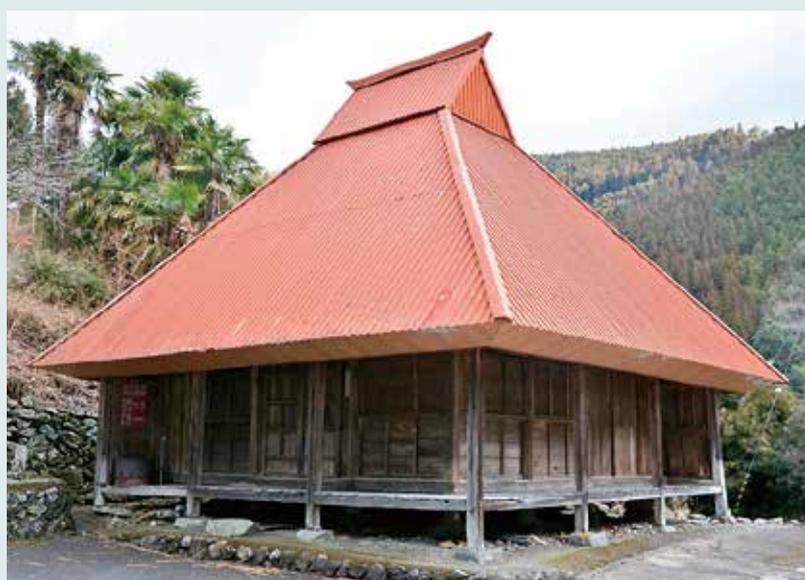


和歌山県指定文化財

地蔵堂の保存修理現場

地蔵堂は伊都郡かつらぎ町花園北寺にあります。この地はもとの花園村で有田川の最も上流にあたり、高野山の南に位置しています。中・近世は高野山領花園荘に属していました。

地蔵堂は国道四八〇号線から分かれ、有田川を渡ったところにある南垣内みなかみがいちの集落の入口付近に建っています。そこは周囲が山に囲まれており、有田川のせせらぎが聞こえてきます。堂は桁行三間、梁間三間、茅葺かやぶき（現状は鉄板葺）の建物で、西向きに建っています。天正十七年（一五八九）の棟札が残っています。建立年代は明らかです。内部は一室で間仕切りを設けず、中央後方に須弥壇しゅみだんを構えています。左側面と背面の縁部分は、後世の改造により堂内に取り込まれています。痕跡や部材の風食ふうしょくの状況から当初は側廻りの建具が入らない、四方吹き放しの堂であったと考えられます。



地蔵堂修理前正側面全景

地蔵堂は、地元の人々によって護ってこられた、いわゆる村堂むらどうです。各種行事や寄合いの場として用いられ、村人の信仰の中心的施設として機能してきました。数少ない一六世紀に遡る村堂の遺構として貴重であると、平成一九年六月に県指定文化財となりました。

現在、この堂を護るのは一〇世帯の方々です。何百年もの間、地元の人びとによって修理が行われ護られてきた堂です。近年、茅葺きの屋根に鉄板をかぶせる修理や柱の根元の修理を行ってきました。しかし、建物が大きく右側（南）に傾いて、背面の桁が雨漏りによる腐朽で折れていました。また、建具の開閉にも支障が出ていました。

さすがに自分たちでの修理は限界であると言うことで、県とかつらぎ町の補助金を受けて修理することになりました。全部分解して、屋根も茅葺きに復する修理は、区の方々の自己負担が大きくなるので今回は見送りました。そこで屋根を解体せずに建物の傾きを修正し、床や縁廻りと建具の修理を行うこととしました。床と縁を分解して、建物をジャッキで持ち上げて水平と傾きを修正しています。そして、礎石の据え直しと柱の補修を行っています。

修理の経過や修理で判明した事については、今後の短信で報告します。（寺本就一）

文化財建造物修理技術者の道具 ⑭ 刷毛と掃除機

修理現場の記録写真を撮影する前に、整理整頓や掃除を行うことについては、何度か紹介してきました。この作業の目的は、現場の状態を整えることにありますが、記録写真のイメージを決めてからその範囲の掃除を始めます。実際に体を動かして木くずや塵を取り除いていると、さらに建物の細かい部分まで意識が行き渡ってきません。そこで、記録したいと考えていた部分とは違う点に気が付いたり、カメラを据える位置の修正点が見えてきたりします。職人さんの作業の合間に確保するこの時間は、新たな「視点」をもたらしてくれることもあるのです。

この作業の中で、一番気づきを与えてくれるのは、以前コラムで紹介した「刷毛」を使用しているときです。顔を近づけ、部材を綺麗にしなが、納まりをよく観察できるからだと思えます。しかし、表面に凹凸がある場合や天井裏、軒裏等の構造上弱く、手が届きにくい部分では、刷毛では塵を取り切れないことがあります。

そんな時は、「掃除機」を使って隙間に入り込んだ木くずや塵を吸い取っています。掃除機は、吸気口を部材にこすり付けてしまうと部材を傷めてしまうので、ホース先端を部材の継ぎ目や隙間に、押し当てたり離したりを繰り返して少しずつ動かしています。修理している建物のことを、しっかりと伝えたいという思いから、目的や場所によって、掃いたり、吸ったりと掃除道具を変えながら見え方を模索しています。

(大給 友樹)



つまがわのきょうら
妻側軒裏の掃除状況

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

時代が変わる 埋蔵文化財課

来年の四月三〇日には「平成時代」が終わり、新しい時代が到来します。今上天皇（現在の天皇という意味）の退位により元号が変わり、時代名も変わるのでありますが、今回のように天皇の代替わりと時代名が一緒に変わるようになったのは、明治時代以降の話です。

旧石器時代から縄文・弥生・古墳時代までは、その時代の代表的な遺物や遺構が時代名となつていきます。その後は、都の置かれた地名を時代名にした飛鳥・奈良・平安時代が続き、幕府を開いた場所を時代名とした鎌倉・室町・江戸時代へと移り変わります。

元号の使用は飛鳥時代の「大化」に始まり、続いて「白雉」「朱鳥」という珍しい鳥にちなんだ元号が断続的に使用されたようです。この時期は別名「白鳳時代」と呼ばれています。

奈良時代には、都の行政機関である左京職が献じた亀に基づく「靈亀」に始まり、「神亀」「宝亀」といった元号が使われています。有名な「天平」もまた、左京職が献じた別の亀の背中に「天王貴平知百年」という文言があったことによるらしいのですが、「本当かよ、左京職！」とツツコミを入れたくなりますね。

なお、「平成」は中国の『史記』『書経』に基づく言葉で「国の内外、天地とも平和が達成される」という意味とのこと。次はどんな元号が続くのでしょうか。

いっそのこと、一度原点に回帰して、元号を「縄文」にしてみたらどうでしょうか。「五月一日から縄文時代です。」なんてニュースで流れたら、平静（平成）ではいられないですね。（丹野 拓）



大日山 35 号墳の翼を広げた鳥形埴輪。
出土当初は、亀じゃないかと言われていた。

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2018年冬～2019年春)

(公財) 和歌山県文化財センター

- シンポジウム「中世紀の国の武士団とその居館」 2019年 2月23日(土) 13:00～16:30
会場：イオンモール和歌山3F イオンホール

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 冬期企画展「岩橋型横穴式石室のはじまり」 2019年 1月19日(土)～2019年 3月 3日(日)
- 春期企画展「縄文・弥生の『海の道』と『陸の道』～紀伊半島と東西交流～」
2019年 3月23日(土)～2019年 5月12日(日)

和歌山県立博物館

- 企画展「熊野と和歌浦 一きのくにの名所をたずねて」 2018年12月 8日(土)～2019年 1月20日(日)
- 企画展「徳川治宝が生きた時代」 2019年 1月26日(土)～2019年 3月 3日(日)
- 企画展「国宝・古神宝の世界 一熊野速玉大社の名宝一」 2019年 3月 9日(土)～2019年 4月21日(日)

和歌山市立博物館

- 企画展「歴史を語る道具たち」 2019年 1月 9日(水)～2019年 3月 3日(日)

高野山霊宝館

- 冬期平常展「密教の美術」 2019年 1月19日(土)～2019年 4月14日(日)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙「新宮城下町遺跡の調査状況」
- 2 特集「新宮城下町遺跡の第2次発掘調査」
- 6 文化財建造物課 短信「和歌山県指定文化財地藏堂の保存修理現場」
- 7 きのくに歴史小話「文化財建造物修理技術者の道具⑭ 刷毛と掃除機」
「時代が変わる」
- 8 催し物案内



風車85 (2018・冬号)

平成30年12月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1
TEL 073-472-3710
FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp